

2022 年度中央大学共同プロジェクト 研究実績報告書

1. 概要

研究代表者	所属機関	理工学部	2022 年度助成額
	氏名	福田 純也	
	NAME	Junya Fukuta	
研究 課題名	和 文	無意識的知識の獲得にみられる普遍性および交差言語的影響	研究 期間
	英 文	Universality and cross-linguistic influences on the acquisition of unconscious linguistic knowledge	
			2022～2023 年度

2. 研究組織

※所属機関・部局・職名は 2023 年 3 月 31 日時点のものです。

	研究代表者及び研究分担者		役割分担	備考
	氏名	所属機関/部局/職		
1	福田 純也	中央大学・理工学部・准教授	プロジェクト統括	研究代表者
2	若林 茂則	中央大学・文学部・教授	理論監修	研究分担者
3	Matthews, John	中央大学・文学部・教授	理論・実験監修	研究分担者
4	Yuan, Boping	University of Cambridge, Faculty of Asian and Middle Eastern Studies, Reader in Chinese Language and Linguistics, Director of Studies at Churchill College	中国語・言語理論監修	研究分担者
5	Williams, John	University of Cambridge, Faculty of Modern Medieval Languages and Linguistics, Reader in Applied Linguistics	実験監修	研究分担者
合計 5名			/	/

3. 2022年度の研究活動報告 ※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

(和文)

2022年度は、主に先行研究の文献調査、実験デザインの確定、実験材（刺激文・絵）の選定を中心に研究を進めた。その目的のため、プロジェクト構成員らがそれぞれの専門に沿った内容で資料収集・文献調査を行い、適宜報告を行ってきたが、本年度の研究を進める核となったものは2回にわたるケンブリッジ大学でのミーティングであるといえる。最初のミーティングは8月に2日間、ケンブリッジ大学にて行われた（以降、第一回ミーティングと呼ぶ）。このミーティングには、同大学プロジェクトメンバーの John Williams、中央大学のプロジェクトメンバーである若林と福田、プロジェクト外部の研究協力者として宇都宮大学の木村崇是が参加した（敬称略）。

第一回ミーティングでは主に実験デザインの大枠を確定し、実験材の言語的要因の統制について議論が行われた。その結果、実験デザインは従来予定していたものより若干の変更が生じ、また統制が必要な言語的要因が多く指摘されたため、実験材の再作成が必要となった。

その後、若林・福田が中心となって約2ヶ月にわたり毎週ミーティングを行い、実験材となる刺激文の再作成を行い、それに対応する刺激絵のサンプルを作成した。これらの材料を持って3月ふたたびケンブリッジ大学でミーティングを行った（第二回ミーティング）。第二回ミーティングの参加者はケンブリッジ大学の John Williams、Boping Yuan、中央大学の若林・福田であった。このミーティングでは、Yuan から実験文に対する中国語の言語的・文化的影響に関する指摘があり、実験文・絵の微修正を行った。また Williams が Gorilla SC による実験のプログラミングのサンプルを作成した。

当初の予定であれば、2022年度内に予備実験を終わらせる予定であったが、従来の実験デザインから変更が生じ、刺激文の再作成が必要となったため、デザインの確定が3月となってしまい、予備実験を行うことはできなかった。しかし、その他の部分に関しては、この2回のミーティングをもって2022年度の計画は概ね達成されたと考えている。刺激文に関しては完成したので、これから刺激絵のサンプルをもとに実験に使用する刺激絵の作成を外注し、実験プログラムに組み込むことで実験の準備が完成する。2023年度は実験の実施、データの分析を行い、その成果を発表すべく学会発表と論文執筆を行う予定である。

(英文) In AY2022, the project members conducted a literature review of previous studies, determined the experimental design, and selected experimental materials (stimulus sentences and pictures). In these activities, the core of this year's research was the two meetings held at the University of Cambridge. In the first meeting, we mainly determined the framework of the experimental design and discussed the control of linguistic factors in the experimental materials. After that, Wakabayashi and Fukuta met weekly for about two months to rework the stimulus sentences in the experimental materials and to create corresponding stimulus picture samples. In March, we conducted the second meeting. Participants there were John Williams, Boping Yuan, Wakabayashi, and Fukuta. At this meeting, Yuan pointed out the linguistic and cultural influence of Chinese on the stimuli and we made minor corrections there. Williams also created a sample program for the experiment using Gorilla SC. The initial plan was to complete the preliminary experiment during FY2022. However, due to the need to change the experimental design and rework the stimuli, these could not be finalized until March. However, through these two meetings, we believe we have accomplished most of our plans for FY2022. In AY2023, we plan to conduct experiments, analyze data, present at conferences, and write papers.

4. 主な発表論文等（予定を含む） ※行が不足する場合は、適宜、行を追加してご記入ください。

【学术论文】《著者名、論文題目、誌名、査読の有無（査読がある場合は必ず査読有りと明記してください）、巻号、頁、発行年月》

【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）

--

【図 書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）

【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）
